

## 7月

目を閉じる前に森の中を見ると5頭の鹿が遠くで草を食べているのが見えた。竹を顎に構え、古典本曲「鹿の遠音」を吹き始めた。高音部に鳥のさえずりが重なり、自然と一体化した音が森をこだまする。演奏を終えて目を開けると森の奥に鹿が1頭、影と光の筋の間を駆けて行く。いや、これは奈良公園の風景ではない。奈良公園には1200頭もの鹿がいて、私もそこで時々演奏するのだが、この風景は両親の住むニューヨーク州グランドアイランドの州立公園での風景である。この夏実家に帰り、バッファロー市とナイアガラフォールズ市の間にあるこの小さな島と、私が今住んでいる日本の奈良とに深いつながりがあることに気付いた。それは鹿である。

奈良公園の鹿は奈良県の象徴の1つであるが、いったいどこから来て奈良公園に居座ったのだろうか。伝説では、奈良公園にある春日大社の神“武甕槌命(タケミカヅチ)”が茨城県から白鹿に乗って御蓋山に現れたことから“神鹿(シンロク)”と呼ばれるようになったとされる。神が白鹿に乗っているのを見た春日大社と興福寺では鹿が神の使いとされ、1637年までは鹿を殺した罪はなんと死刑であった。奈良公園の鹿は万葉集の時代(750)までさかのぼるそうだ。

尺八の楽曲である「鹿の遠音」がいつ書かれたのかは定かではない。各流派の「鹿の遠音」は似ているものの、大部分を演奏者の表現に託している。この楽曲が表現しているとするのも様々である。例えば、牡鹿が雌鹿を呼び、雌鹿がそれに応えているというのが一説である。この楽曲は2人で“掛け合い”という構成で演奏されることが多い。しかし、8月14日に Albright Knox Art Gallery で私が行う予定の独奏の場合は、牡鹿が紅葉する森の中で雌鹿を呼び、それがこだまして帰ってくる場面を想起させる。この曲は人類、自然、そして宇宙間のコミュニケーションを表現している。

バッファロー／ナイアガラ地域の先住民であるセネカ族はグランドアイランドに定住はしなかったが、鹿や狼、熊などを狩猟するために島を訪れていた。彼らは生きるためにこれらの獲物を獲ったが、部族は動物との精神的な深いつながりを忘れなかった。アメリカ先住民の言い伝えでは白鹿、または霊鹿(ghost deer)は霊的な意義があり、尊重し、守らなければならないと考えられている。神道でも鹿は神の使いであると信じられており、それ故に鹿は保護されてきたのである。残念ながらグランドアイランドで白鹿を見ることはできなかったが、奈良公園では1頭見たことがある。奈良公園の鹿は何世代にも渡り人間に守られてきたおかげでこれだけの数の鹿が野放しで生活しているのである。それゆえ白鹿も見ることができたのであろう。

この「鹿の遠音」は自然を表現している曲である。この曲を聴き、自然を感じることで自分自身についても学ぶことができるのではないだろうか。



神鹿(しんろく)

770(宝亀1年5月11日)

伊予国、白鹿を奉献(日本記略)